坂本龍馬と知多の札

尾州古札研究会　会長　本美　吉朗

新年明けましておめでとうございます。二〇二六年もよろしくお願いいたします。

さてこれから述べることは、小生の推測でもないし、針小な事実を拡大解釈したものでもない。明確な記録に残っている事実である。

幕末から明治初期、薩摩藩をはじめ、会津藩、安芸藩などでも、二分金の贋金を鋳造していたことが判明している。特に薩摩藩は、かなり早い時期から鋳造技術者をわざわざ江戸から呼び寄せ、相当な額の贋金を作ったとされている。その贋二分金を薩摩から持ってくるように坂本龍馬（写真1）は岡内俊太郎という人物に命じた。そして龍馬は岡内に「土佐藩でも薩摩藩と同じように贋二分金を作って戦乱に備えるべき」と言った。龍馬から密命を受けた岡内は下横目という土佐藩の治安機関の内最下位の職種に属する土佐藩の官吏であった。この岡内俊太郎が上司である土佐藩の重役佐々木高行に宛てた手紙に、こういう記述がある。「出達（イカルス号事件の用件で長崎から薩摩藩への出港のこと）の際、私へ龍馬よりの心付に依り薩摩に於て作り居る二分金の模様仕上り品を探り取来り、薩藩同様之（これ）を本藩に於ても作らずては、事を発したる時差支へを生ぜん」。こうして龍馬から命令された岡内は苦労の末、薩摩の英学塾の留学生から贋二分金を入手することに成功した。ところでなぜ龍馬は岡内に頼んだのだろうか？ それは、龍馬が岡内俊太郎に絶大な信頼を寄せていたからだと思われる。岡内は龍馬の周りにいた百戦錬磨の猛者たちとはちょっと違い、「誠実な役人」というキャラクターを持っていた。

写真1 坂本龍馬

岡内俊太郎は、大政奉還前後の龍馬の活動を大きく助けている。龍馬が、千丁のライフルを持って土佐に帰郷した時も同行していたし、大政奉還の会議の日、後藤からの手紙を龍馬が開封した時も、その座にいた。こうして岡内が入手した贋二分金を見た龍馬は大喜びした。そして、すぐに岡内にこういうことを言った。「土佐藩の上層部に、贋金を製造するように言え」と。岡内は、その通りに、土佐藩の上層部に献策した。土佐藩の上層部は「今すぐには出来ないが、必ず検討する」と返答した。しかし贋金を強力に推進していた龍馬は、岡内が藩に献策した直後に、残念ながら京都で暗殺されてしまっていた。

ところで土佐藩は、この計画を実行するまでには随分と逡巡したようである。なにしろ、贋金製造というのは重罪であるからである。慶応四年（後になって明治元年）二月二二日、土佐藩の征討総督の深尾左馬之助（家老）が、土佐藩の国元の家老あてに次のような意味の手紙を送っている。「贋金鋳造は、藩内に異論があって中断されているが、大坂藩邸では準備をしていることだし、山内容堂公（藩父）も了解されていることなので、早急に開始されたし」。やがて鳥羽伏見の戦いの後、ついに土佐藩は、官軍の東征に参加することを決定した。しかし、江戸や東北に遠征するにはお金が必要である。当時の土佐藩の財政は火の車であり、軍費の捻出は急務であった。そしてようやく土佐藩は、明治元年春頃に贋金製造に着手するのである。

土佐藩の贋金製造は、最初、大坂の藩邸（蔵屋敷）で行われたようである。その後、贋金製造工場は、土佐の故吉田東洋邸に移されたという（『岩崎弥太郎』松村巌著）。土佐の歴史資料集である『皆山集』の第七巻にも土佐城下の吉田東洋邸で贋金を鋳造していたという記述がある。こうして土佐藩の贋金作りは、国を挙げて行われた。藩では、二分金の原材料となる金銀の供出を領民に求めた。「大量の寄付をした者は士分を与える」という特例まで発した。幕末に土佐の領民の日常を詳細に記録した『真覚寺日記』には、明治元年の閏四月二十二日付で「一分銀を作るために他国の銀座の職人が百五、六十人ばかり上町に滞留している」とも書かれている。但しここでは「一分銀を作るため」と書かれているが、これは「二分金」の間違いだろうといわれている。なぜならこの日記の執筆者は一般庶民である寺の住職であり、また従来より土佐領内では、金貨より銀貨の方がなじみがあったので、「一分銀を製造している」という噂が流されていたのであろう。尚、上町というのは、高知城のすぐ近くに位置し、吉田東洋邸にも近い場所である。

さて慶応四（一八六八）年二月九日、有栖川親王が大総督となり、官軍の江戸や東北地

注記のない画像は原寸ではありません

方などへの鎮撫作戦が始まった。官軍（特に薩摩藩、土佐藩）は、当然ながらこの道中で贋金を軍費としてばら撒きながら進軍した。その結果、明治初年百数十万両もの悪質な二分金（写真2）が全国に出回った。二分金は当時の主要貨幣であったので、これが物価を高騰させ庶民を苦しめたため、各地に一揆や打ちこわしが発生した。また外国公使からの抗議もあって、新政府はその通用を停止した。後の引き換え高をみると、信濃の三五万両余、岩代の一五万両に次いで、尾張は一三万両余に達した。明治二（一八六九）年七月、南郡總管所が管下の村々を調査した結果、贋金所持高は一万六千四百四十七両もあ

写真2
二分金

ることが分かった。当然ながらその贋金の大半は、薩摩と坂本龍馬が献策した土佐藩の贋二分金と言われている。そして所持者の大半は真贋の区別もつかない庶民層で、これをただ回収したのではその後の生活が行き詰まり、不穏な情勢を招きかねなかった。そこで尾張藩では各代官所ごとに代替紙幣を発行させたが、知多半島を管轄する南郡總管所に於いては、管内の有力者（庄屋・富商・富豪等）を召集して、明治政府の対策が実施されるまでの融通を計るように命じた。

南郡總管所に召集された有力者は全部で六七名で、此の者たちに一種の商品券である品物価切手を発行させ、これで贋金を引き換えようというのであった。南郡管下とは、知多郡（当時犬山藩領になっていた成岩村、乙川村、亀崎村、吹越村等を含まず）全域の他、愛知郡の鳴海（現名古屋市緑区鳴海町）や三河国加茂郡の寺部（現豊田市）等が含まれる。大野組や岡田組からは管内一円通用の銭札

とし、引換所を立てて本格的に流通させるべきだ、という意見が出されたが、結局、地区毎に一七の組に分かれて発行することになった。そして南郡總管所（慶応四年八月～明治二年一〇月まで）は、それぞれの地区の代表を總管所に召集した。小生が居住する現半田市は半田組に所属していたが、半田組に所属した村は以下の通りである。大足村、長尾村、半田村、横松村、萩村、宮津村、板山村、福住村、植村、大古根村、角岡村、椋原村、高岡村、矢口村、稗之宮村、卯之山村、坂部村、白沢村、草木村。そしてこの半田組から南郡總管所へ召集された有力者は、小栗三郎兵衛（半田村）、中野半六（半田村）、中野小吉（半田村）、小栗富次郎（半田

図1
酒弐合預り代銀壹匁札

村）、新美八次郎（大古根村）、竹内和平次（卯之山村）の六名であった。

そして明治二年九月に、半田組より「酒弐合預り代銀壹匁」札（図1）と「酒壹合預り代銀五分」札（図2）の二種の札が発行された。ご覧の通り実際に札発行に関わったのは、先の六名の内、小栗三郎兵衛、中野又左衛門（中野小吉）、中野半六、小栗富次郎の四名であった。尚、召集された六名の中には、中野又左衛門の名前が無く、代わりに中野小吉の名前が見られるが、これは中野又左衛門が四代目を名乗る前の名前である。

ところでこの札を発行した小栗三郎兵衛は初め小栗三郎と称していたが、家督相続で一〇代目三郎兵衛と称するようになった。一〇代目は

図2
酒壹合預り代銀五分札

天保六（一八三五）年九月二三日に半田村で生まれ、文久二（一八六二）年下半田村の庄屋となり、日夜村政に励んだ。また慈善事業にも熱心で尾張藩より苗字帯刀を許され、元治元（一八六四）年には献金の功により一代限り御目見を許されている。文久二（一八六二）年鳴海陣屋を通じて長州征伐の御用金として、半田村に千両の御用金が命じられた。この時、中野又左衛門と中野半六は百五十両、小栗三郎兵衛と小栗富次郎は百三十両受け持った。四代目又左衛門は盛田一族の盛田太助家より養子に入った。四代目が婿入りした時、すでに又左衛門家は半田最大の富豪であり、若い四代が指図を下すまでもなく、事業は順調この上なく動いていた。

注記のない画像は原寸ではありません